



道を求めるころ (5)

雪山童子の求道

岡本英夫

羅刹に出会ったその初め、童子は、自分は結構道を求めて歩んできているのだという意識だったのかもしれませんが。相手の羅刹はこんな醜い鬼、何を知っていようかと羅刹を見下ろしていたのかもしれない。しかし、考え直してみると、自分は道を求めてきているとは言っても、ほとんど何も知らないのだと。そこまで下りてくるわけです。一方、羅刹は、表面は醜悪だけれども、仏に出会って素晴らしい教えを知っているのかもしれないと。彼の本当の存在意味を見抜いてゆくわけです。

立場が逆転するわけですね。水が高いところから低いところへ流れるように、教えも低いところへ流れ注ぐのです。そこで、童子は羅刹にもう一回問うてみるのです。

童子は前に進んで羅刹の所に至り、次のように問うた。「あなたは、一体どこでこの半偈を得ることができたのですか。この半偈は怖畏を離れている者でなくては説くことのできないはずのものです。しかも、この半偈の意味するところは、あらゆる時代における仏の正しい道を表している。一切の人々は、常に様々な煩惱(注1)の網に覆われて、生涯このような教えを聞いたことがないのです。」

この童子の言葉に羅刹は応じます。

「童子よ、俺に今それを問うてはいけない。何故かと言えば、俺は食べるものを得ることができなくなってから、すでに何日も経っている。



木のもとのお話(8)

親鸞聖人はお釈迦様と同じように、自分自身が聖者や超人になれないとご理解されました。いつわりのないほんとうのお釈迦様のお教えを受け、浄土の上に立ち、生きるということが「浄土真宗」の大切なところですよ。

注1) 煩惱 (ボンノウ) 身と心を乱し悩ませる心のはたらき。その根源は、貪欲 (トンヨク、自己中心的な欲)、瞋恚 (シンニ、人を滅ぼすいかり)、愚痴 (グチ、真実を知らない心) とされる。

注2) 財施 (ザイセ)、中3) 法施 (ホウセ) 仏教者などに物資を与えることを財施、教えを説き与えることを法施という。また、怖れを取り除いてやることを無畏施 (ムイセ) といい、併せて三施という。

注4) 利益 (リヤク) 仏教によって得られる恩恵。救い。

方々探し回るのだが何も手に入らない。今のことばは、その飢えの苦しみによる心の乱れの中から言ったにすぎないのだ。本心から出た言葉ではない。」

この羅刹の言葉は用意周到さを感じさせます。一応、先刻自分の言ったことばは腹の減った苦しみから出たのにすぎない。たいしたものではないのだと謙遜をします。しかし、同時に「腹が減ってものを言うのも苦しい」という自分の事実を明確に表明しているのです。この事実表明が後になってものを言います。

童子は重ねて羅刹に問います。

「もし、あなたが私の為に後の半偈を説いてくださるのなら、私は生涯あなたの弟子となりましょう。前の半偈はまだ意味も完全には尽くされていないのに、どうして最後まで説き終わろうとされないのですか。およそ財施（注2）は尽きることがあっても法施（注3）は尽きることはない。しかし尽きることなくても法施は利益（りやく 注4）するところが多い。前の半偈を聞いて私は驚きと疑いを持ちました。どうか後の半偈でそれを断ち切ってください。」

全部をどうして説かれないのですかと。どうか後の半偈を説いてほしいと要求するわけです。その際、法を説くことがもっている優れた利益までも説明して要求します。法を説くのは羅刹のほうなのに、聞くほうの童子がなぜ分かったように法の利益の解説をするのでしょうか。法そのものに出会うことなく、頭だけで解釈している童子の姿があるようです。

これに対し羅刹が答えることばが、また大事なポイントを突いています。

「あなたは頭がよく働く人だ。しかしその頭で、ただ自分のことだけしか考えず、たった今、俺が飢えに苦しんで説くことができないと言ったことなど、まったく考えてくれていないではないか。」

これが羅刹のことばです。童子の気持ちとしては、何としてでも後の半偈を知りたいのです。だから羅刹に要求するけれども、羅刹としては何日も食べていず、腹が減ってとても後の半偈など言えないと。このように、話す力がないと言っているにも拘らず、それを無視して童子は説いてくれと要求する。その童子の態度に問題ありと羅刹は指摘するのです。相手の羅刹の実情など眼中になく、自分の思いだけを主張している。その自己中心さを羅刹が突くのです。これは童子にとっては大変痛い、身にこたえることばだったと思います。

このことは道を求める者の一つの共通の問題点かもしれません。自分は教えを聞いて道を求めている者だということを正当化するというか、善いことをしているのだということで、自分を中心に世界が回っているように考えてゆくわけです。そこを、ズバツと指摘された。童子は大いに申し訳ないと思ったことでしょう。

「それでは、あなたの食べるものはどのようなものですか。」

と尋ねます。

しかし羅刹は、

「もうよい。俺がもし説けば、沢山の人を恐れさせてしまうだけだ。」

このように言います。童子は、

「今ここには私一人しかいません。しかも私はあなたを恐れていません。どうして説いてくれないのですか。」

（続く）

